

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：31501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370958

研究課題名(和文)「民族衣装」の創成と衣生活の変遷に見る東・東南アジア「華人性」の再構築

研究課題名(英文) Reconstruction of "Ethnic-Chineseness" in East and Southeast Asia through the Creation of "Traditional National Costume" and Transformation of Clothing

研究代表者

謝 黎 (Xie, Li)

東北芸術工科大学・芸術学部・准教授

研究者番号：30424295

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：「民族衣装」と呼ばれる服は、当該民族の歴史や伝統の意識、それへの帰属意識を表す物質的象徴として語られることが多いが、モダンの産物でもある。本研究では、植民地台湾において旗袍(チャイナドレス)の着用が必ずしも「抗日」とは限らないこと、同じく和服を着用するがゆえに「親日」とも言い切れないことを論じ、また社会的文脈を異にするマレーシアでは、華人女性にとっての旗袍は、中国女性の伝統服でありながらモダン・ファッションでもあり、エスニシティと女性性のはざまに立ち現われるものであることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Clothes called "traditional national costumes" are often talked about as a material symbol that represents the consciousness of an ethnic group's history and tradition, and the sense of belonging to it. However, it is at the same time a modern product. In this research, the author discusses the fact that wearing a qipao (china dress) in colonial Taiwan was not necessarily an "anti-Japanese" attitude, while at the same time having worn kimono can not be regarded as "pro-Japanese". The author also elucidates the fact that in Malaysia, with a social context different from that of Taiwan, Chinese women tend to regard qipao not only as a Chinese woman's traditional costume, but also as a modern fashion, and that it emerges in a certain gap between ethnicity and femininity.

研究分野：文化人類学

キーワード：マレーシア華人 華人性 出身地と居住地 アイデンティティ 客家 旗袍(チャイナドレス) 民族服 ファッション

研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

19世紀から20世紀にかけての1世紀は、東南アジア・東アジアの諸地域にとって激動の時期であった。植民地主義支配によって、西洋的な価値観や生活様式などが、強制的あるいは内発的に、この地域の人々の生活に入り込んできた。その際、多くの「伝統文化」は西洋文化（一部日本文化）との出会いの中で、抵抗や流用を含む融合などのプロセスを経て、新たな文化の形態に（再）編成され、その結果、部分的にはクレオール的な文化が形成された。当該地域の現在の文化特性はこれに大きく規定されている。こうした文化の（再）編成は、最も日常生活のなかで目に触れやすい服飾の様態に顕著に見られる。

本研究では中国本土外の華人の帰属意識に着目し、在地住民（非華人）の「民族衣装」と在地化した華人の「衣生活」を取り上げるが、探求するのは植民地的モダンという時代文脈における文化的・民族的帰属意識が、現在の華人アイデンティティの源流を形成したという新たな命題である。植民地状況を中心とした、西洋と在地の文物の交流、融合、流用の理論に関する文化人類学における研究としては、D.Miller、N.Thomas、T.Barringerなどの研究が知られ、また日本でも最近では総合的な『ものの人類学』（床呂ほか編 2010）中の諸研究があり、東南アジアの民族衣装や布に関する研究も多く見られる。しかし、「もの」を西洋（台湾の場合宗主国としての日本）、中国及び東南アジアから構成される三角測量的な対象とする研究は限られている。この点も本研究を着想した動機の軸である

本研究で、衣のモダン性と民族的なものを

併置して探求しようとするのは、こうした研究の未開拓状態によるものである。探求課題の具体的内容は、以下のようにまとめられる。

時代の流れを追いかけるモダンなファッションと、それぞれの地域にあるとされてきた「民族衣装」の関係は、対照的であるとともに、相互に影響するものである。「民族衣装」と呼ばれる服は、当該民族の歴史や伝統の意識、それへの帰属意識を表す物質的象徴のように語られることが多い。しかし、現在われわれがいう「民族衣装」はモダンという時代の産物でもあり、その民族の伝統やアイデンティティそのものも、しばしばモダンに根ざした意識である。また、この時代意識を他の極から支えるのが、モダン・ファッションのコンテンツであり、またモダニティという概念に含まれる意識そのものなのである。かつて西欧（日本を含む）諸国に植民地化された地域に住む華人たちは、故地（中国本土）における「民族衣装」の創出とモダン・ファッションの転変を追い求めつつ、同時にまた、現居住地であるマレーシア国内などにおける同様の現象にも目を向けた。華人の中のあるものは、故地にあるものとは異なる「民族衣装」を身につけることになるが、ここに働く文化混淆のダイナミクス（「華人性」）は上述した三角測量によって、はじめて解明されることになると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「衣」の変化に焦点を当てることにより、19世紀後半から20世紀にかけての東・東南アジアにおける華人社会の生活文化とアイデンティティの変遷を探り、そ

れが現在見られる「華人性」にどのような効果を及ぼしているかを探ることである。近代的(モダン)なファッション(「時装」と、伝統を継承する「民族衣装」と)との関係を軸に、(1)当時の植民地的モダニティの形成と、(2)出身地と居住地との生活文化の連続と断絶に関わる感受性、(3)文化的帰属意識の特徴を探求する。2つの服飾形態の通用をみることによって、「もの」の移動と流用・模倣などによる地域と民族の境界の乗り越え方に目を向ける。中国本土(上海)を基点に、台湾及び華人文化の存在が顕著なマレーシアを視野に入れた三角測量的研究とする。

3. 研究の方法

本研究では2014年4月～2017年3月までの3年をかけて、中国本土、マレーシア及び台湾という国と地域で現地調査を行うこととした。衣の流行傾向や民族衣装と華人のアイデンティティに関わる文献の収集を行い、資料推移データを編年的に整理し、影響・系統などの関連を裏付けるためである。

現地調査は、博物館における資料の観察、過去の新聞・雑誌類における記事、植民地政府と独立後の政府による公刊報告類、民族誌的な刊行物における当該問題への言及などの文字資料によるほか、現地華人(漢族)と出身地別会館組織でのインタビュー、儀礼や祭りなど文化的活動での観察と聞き取り調査、現地の学術研究機関・民間文化団体での意見聴取を実施した。

4. 研究成果

20世紀初頭に中国の上海で新しいファッションとして現れた旗袍は、そもそもは身分制に基づく清朝期の満洲人女性の伝統旗袍であ

った。それが都市文化の産物として流行する民国期の新型旗袍へと変化し、さらに現代では中国女性を表象する「伝統服」として位置づけられるようになり、今に至っている。本研究は大陸の旗袍と絡みながら、台湾とマレーシア調査によって得られた知見は以下のとおりである。

(1) 台湾華人の衣生活

植民地台湾の旗袍は、単に一般的な都市大衆文化の産物とか消費文化を享受するファッション、あるいは逆に「中国人」の独自民族性を象徴する記号として機能する、といった解釈だけでは説明しきれないところがある。台湾の旗袍にはファッションと民族象徴性の間に独特の「ねじれ」のようなものがあるのだ。

日本と大陸との狭間にある台湾は、旗袍が新たな意味をもつようになる。つまり、流行と植民地支配の両側面から読み取ることが出来る。旗袍を身に着けたからと言って、必ずしも「抗日」とは限らない。同じく、和服を着用するがゆえに「親日」とも言い切れないのだ。1930年代という時代は、世界中を席卷したモダンの現象が現れ、多くのモガ・モボがいた。彼/彼女らは戦争という現実に突き刺されながら、モダンの余韻を楽しんでいた。

日本人から見た台湾の旗袍は「支那服」であり、「中国的」と映っていたのだが、台湾の漢人女性にとっての旗袍は新しいファッションの一つであり、モダンな洋服と似たような感覚で着用していた。台湾の漢人女性が思っていたところの、本来の「中国的」とは、旗袍よりもむしろ出身地の記憶が秘められていたツーピース式の「本島服」だったのである。日本人から見て「中国的」な旗袍は必ずしも彼女たちが思っている「中国的」とは限らな

かったということなのである。もちろん、時代とともに、故郷や離れ離れの親族への思慕の念や、先祖尊崇の念が高まっていったことなどを考えると、台湾華人にとっても旗袍に「中国的」な要素がなかったというわけではないが、それは、おそらく日中戦争や日本による台湾支配といった背景をもとに、新たに創造された「中国的」=「大陸における愛国のイメージ」の表れではないかと思う。

近年において、台湾の漢人は自分のアイデンティティを表すときに、目に見えるかたちで何を身に着ければいいと考えるのか。あるいは、あえて着けないようにしているものがあるのか。ある講演会で以下のような話を聞いた。近年の台湾では「台湾小姐」(ミス・台湾)という美人コンテストが開催されている。その前身として「中国小姐」(ミス・中国)があり、そこで「中国小姐」(ミス・中国)に選ばれた女性は、旗袍を身に着けないといけなかった。しかし、「台湾小姐」(ミス・台湾)に選ばれた女性は、逆に旗袍を身に着けてはいけないのだ。台湾において、「台湾小姐」と「中国小姐」とでは、旗袍の意味が違うということなのだ(学会発表:「植民地台湾の旗袍(チャイナドレス)に関する一考察」2015.4.25 第34回国際服飾学会大会、於東京家政大学。論文:「植民地台湾における旗袍(チャイナドレス)」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』第15号 pp.99-106、2016年)。

(2)マレーシア華人の衣生活

マレーシア華人女性にとっての旗袍は、中国女性の伝統服でありながらモダン・ファッションでもある。また、女性の身体美を表すときにもってこいのデザインに魅力を感じていることが分かる。そして、旗袍を着ること

によって所属華人集団のアイデンティティに結び付くことも見られ、衣服としての旗袍は中国の伝統文化を表象するものとしても認識している。しかし、現実に華人たちが「民族衣装」についてどのように思っているのか。シブ市のサラワク華族文化協会の華人たちが国際会議に参加する際、何を着て行けばいいのか困っていたことが現地調査で分かった。

旗袍を聞くと何を思うのか、とシブの華人たちに聞いたところ、第一印象は「華人」ではなく、「身材」(スタイル)のことが思い浮かんでくるという。また、正装やコンテストの服であり、日常生活で着るものではない、といったイメージをもつ。華人の旗袍に関する知識は、実際の生活の中で伝承されるものではなく、学校教育の一環で(マレー人の学校)教えられている。学校では「種族」を区別するために旗袍が華人の服であることを示しているという。こうして、日常で着る服と学校教育で知った旗袍との間に、歴史的記憶と現実との乖離が浮き上がってくる。

こうして、実際の生活の中で着用しないにも関わらず、旗袍から想起される「華族の一員」「誇る文化」「懐かしい感情」といったイメージは、南洋華人にある程度共有されている。一方、教科書に語られる旗袍は、移民としてマレー半島に到着した華人と結び付けられ語られる過程で、個人を超えた集合的記憶、さらには国史の一部へと昇華され、マレーシア国民の一員としてある立場を獲得した(学会発表:「マレーシア華人にとって 旗袍(チャイナドレス)とは何か? - サラワク州シブ市の華人社会を事例として」国際服飾学会第35回大会2016年4月23日 24日大阪女子短期大学グリーンホール。「マレーシア華人女性の衣生活にみるファッション性と政治性」サ

ラワク州シブ市華人社会を事例として」、国際服飾学会第 36 回、2017 年 4 月 22 日 - 23 日、昭和女子大学)。

また、マレーシア・サラワク州のシブ市での調査中、チャイナドレス交流会における講演を行い、現地社会にこれまでの知見を伝えた。現地のさまざまな華人集団から聞き書き調査を行い、貴重なデータを得た。彼らにおける旗袍観と着用の実態を報告し、その様子は現地新聞(2016.8.26-27 の『詩華日報』、『星洲日報』、『聯合日報』)で報道された。

「民族衣装」と呼ばれる服は、当該民族の歴史や伝統の意識、それへの帰属意識を表す物質的象徴のように語られることが多い。しかし、現在われわれがいう「民族衣装」はモダンという時代の産物でもあり、その民族の伝統やアイデンティティそのものも、しばしばモダンに根ざした意識である。また、この時代意識を他の極から支えるのが、モダン・ファッションのコンテンツであり、またモダニティという概念に含まれる意識そのものなのである。かつて西欧(日本を含む)諸国に植民地化された地域に住む華人たちは、故地(中国本土)における「民族衣装」の創出とモダン・ファッションの転変を追い求めつつ、同時にまた、現居住地である台湾やマレーシアなどにおける同様の現象にも目を向けた。

華人の中のあるものは、故地にあるものとは異なる「民族衣装」を身につけることになるが、ここに働く文化混淆のダイナミクス(「華人性」)は上に述べた三角測量によって、はじめて解明されることになると考えられる。

本研究は、中国本土(上海)を基点に、台湾及びマレーシア華人の衣生活の一側面を明らかにした。今後、華人女性の衣生活と化粧文化に焦点を当て、過去 1 世紀半にわたる中

国内外の華人社会における「女性性」と「社会性」との関わり方をさぐり、ファッションとしての旗袍(チャイナドレス)、伝統継承を表現する民族衣装、自他の視線を意識する化粧行為を軸に、「華人性」の生成過程におけるジェンダーの意味合いを追究することを課題し、全体として良好に遂行しえた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 4 件)

謝黎「植民地台湾における^{チャイナドレス}旗袍」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』、査読無、第 15 号、2016、pp.99 - 106
DOI : ISSN 1348 - 3021

謝黎「チャイナドレスに隠された思想」日中文化誌『和華』特集「服から伝わる物と事」、査読無、第 9 号、2016、pp.35 - 37
DOI : ISBN978 - 4 - 434 - 21659 - 6

謝黎「なぜ 素顔美人 が好まれるか? 化粧へのまなざしと中国的 美人観」『歴史遺産研究』、査読無、N0.10、2015、pp.37 - 42

謝黎「現代中国における 伝統服 の受容に関する一考察 上海 APEC 会議の唐装を事例に」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』、査読無、第 13 号、2014、pp.95 - 105
DOI : ISSN 1348 - 3021

[学会発表](計 4 件)

謝黎「マレーシア華人女性の衣生活にみるファッション性と政治性 サラワク州シブ市華人社会を事例として」、国際服飾学会第 36 回、2017 年 4 月 22 日 - 23 日、昭和女子大学
謝黎 “Women in Shanghai: Changing sense of beauty and views of makeup” 第 31 回国

際心学会議 2016 冠シンポジウム、2016 年 7 月 24 日(日) 29 日(金)、会場：パシフィコ横浜

謝黎 「マレーシア華人にとって ^{チャイナドレス} 旗袍とは何か? - サラワク州シブ市の華人社会を事例として」、国際服飾学会第 35 回大会、2016 年 4 月 23 日 24 日 大阪女子短期大学グリーンホール

謝黎 研究発表「植民地台湾の旗袍(チャイナドレス)に関する一考察」2015.4.25 第 34 回、国際服飾学会大会(於東京家政大学)

[図書](計 1 件)

謝黎 『世界の愛らしい子ども民族衣装』、株式会社エクスナレッジ、2016、担当ページ：22 - 23、32 - 90、109 - 111、138、150

[その他](計 5 件)

謝黎 「中国社会における日中韓欧化粧品の特徴と問題点」、株式会社資生堂共同研究発表、2016.2

謝黎 「日中における美意識・美人観に関する比較研究 中国の化粧文化、面飾 の歴史」、株式会社資生堂共同研究発表、2015.4

謝黎 「『民族衣装』への招待 チャイナドレスの醍醐味」、敬文舎、2015、NO.10 『MY 舍人倶楽部』、pp.6

謝黎 「中国の化粧(妝)文化 面飾 の歴史」、株式会社資生堂共同研究発表、2015

謝黎 公開講座「日常の彩り 化粧をとおして見る日本と中国の美的世界」、東北芸術工科大学、2015.1

謝黎 「マレーシアの華僑たち」、東北文化友の会会報 『まんだら』、2014、Vol.56、pp.30 - 31

謝黎 講演「チャイナドレスと化粧 美し

いのは服か、顔か」、化粧文化研究者ネットワーク第 30 回研究会、東京株式会社資生堂ビューティークリエイション研究所、2014.6.21

謝黎 「描かれたチャイナドレス 藤島武二から梅原龍三郎まで」、ブリヂストン美術館の展示への謝黎所蔵資料財提供、2014 年 4 月 26 日 - 7 月 21 日

6. 研究組織

研究代表者

謝黎 (XIE LI)

東北芸術工科大学・芸術学部歴史遺産学科・准教授

研究者番号：30424295